「ただいまー」
　陽が傾き始めた時になって、バスケットに卵やミルク瓶、果物などの食糧を詰め込んだリアムが家に帰ってきた。
「よいしょっと」
　リアムはバスケットを下ろし、両手にふーふーと息を吹きかけると、何かが変だと気づいた。
「あれ？」
　外にはノランの服が干してあるし、家の鍵も開いていた。ということは二人は先に帰ってきているはず。
「どうしたんだろう？　ネックー！　ノランー！　いるんでしょう？」
　二階へ続く階段へ向かって呼びかけた。すると、
「おう、遅かったじゃねえか」
　二階からノランが下りてきた。
「うん、昨日のことで話し込んじゃってさ。ネックは？」
「ネックなら上で休んでるぜ、そそそれよりさ！」
　話を必死に遮ろうとするノランにリアムは目を細めた。何か悪巧みでも考えているのだろうか。
「ん？」
　足元を見ると、水の跡が階段まで続いている。
「もしかして、溺れた犬でも助けたの？」
　以前も二人が動物を助けたことがあったがその時は家中が泥だらけになっていた。
「い、いや。まあそんなところだ！　はっはっはっ！」
　あまりにも胡散臭いノランの笑い声に、リアムは、
「もう」
　とほっぺたを軽く膨らませ、バスケットの中の食糧をテーブルに並べ始めた。
「ノラン、これそこに置いて」
「お、おう！」
　ミルク瓶をノランに渡した一瞬の隙をついて、リアムは早歩きでノランを交わし階段を上がった。
　警戒心の薄れたノランはもたついて反応が遅れてしまう。
「うお！　リアムてめー！」
「隠し事するからよ。ネック起きてるんでしょう？」
　二階の寝室のドアをノックせずに開けると、ネックが椅子に座っていた。
「おかえり」
「やっぱりいたじゃない。何して……」
　リアムは時が止まったように固まった。
　ベッドで、誰か寝てる。
　犬ではない。
　桃色の長い髪。優しくわずかに垂れた眉毛に、眠っていても大きいとわかる目。はっきりと濃くて長いまつ毛、スッと通った鼻筋に、薄い唇、整った輪郭、色白、小顔、仙姿玉質……。
　お。
　女の子だ。
　若い女の子が寝てる。
　その女の子がこちらに向かって寝返りを打った。
　破れて面積の少ない衣服から、少女の胸がちらりと覗いた。
　わかいおんなのこがうすぎでべっどにねてる。
「へ」
　リアムはわなわなと震えながらポツリと呟き、
「へ？」
　ミルク瓶を持ったまま追いかけてきたノランが首を傾げると同時に、
「変態――――――――――――――――――!!」
　リアムの大声に、ネックとノランはたまらずひっくり返った。
「ちょっと嘘でしょ!?　何してるの？」
　リアムは顔を真っ赤にし、両手で口を押さえた。
「若い女の子連れ込んで……!!」
「リアム落ち着いて聞いてくれ」
　ネックが立ち上がって両手で宥めたが、リアムの耳には届かなかった。
「落ち着いてられるわけないじゃない！　楽園とか言ってたけど、本当にそうするなんて思わなかった！」
　首を振りながら後退りをする。
「人攫いだなんて……」
「いや違うんだってマジで！」
　二人が事情を説明し、なんとかリアムを落ち着かせることができたのは、すっかり陽が暮れた頃である。